

家族造形法の深度

11 事例検討における家族造形法の展開

「アウトサイド」と「インサイド」

早樫 一男

家族造形法を使った事例検討の場合、事例提出者（彫刻家役）の作る作品（家族彫刻）は、あくまでも事例提出者によるケース（家族）のアセスメントや見立てです。

「アウトサイド」から理解した家族イメージを「造形」というかたちで、視覚的・具体的に再現したものと言ってよいかもしれません。家族メンバーを配置することによって、家族システム（全体）へと視野を広げることができます。

家族役からのフィードバックはさまざまなヒントを与えてくれることとなります。「インサイド」からの声と言ってよいかもしれません。家族役に対して、細かな情報を伝えていないのに、実際の面接の中で語られた「言葉」を、家族役がフィードバックの言葉として語るという不思議な体験はこれまでたくさん経験してきたところです。このような場合、事例提出者のアセスメントが大きく間違っていなかった考えることができます。

事例提出者にとって予想外の言葉がフィードバックされたなら、それは新たな気づ

きにつながっていきます。

家族造形法を使った事例検討は、従来から行われている机上の事例検討ではなく、体験を通じた事例検討法である分、ライブ感覚も含まれた展開であるということについてはこれまでも言及したところです。

また、展開によっては、事例提出者はもちろん、参加者にとっても興味深いものとなります。

これまで紹介しているように（第2号～第5号 参照）、第一段階は、事例提出者のイメージとして思い浮かぶ家族（造形）を作ります。そして、各メンバーからのフィードバックとなります。

その後の展開の一つ（第二段階）を紹介します。

居心地のよい状況（関係）を作る 確認する

各メンバーの感想（フィードバック）はさまざまです。自分自身の姿勢や相手との

関係（距離感や視線の向きなど）を通して、「とても楽だ」「あたたかい」「安心できる」といった肯定的な感想がある一方、「窮屈」「しんどい」「居心地がよくない」「居場所がない」などといった否定的な感想もあります。もちろん、その両面について、語られることも少なくありません。

そこで、これらのフィードバックを丁寧に確認した後、『それぞれにとって居心地のよい状況を作ってみましょう』と提案することが少なくありません。

家族が自ら動く

他の家族の動きに触発されて動く

その際、家族役に対して、自ら動くように教示しています。もちろん、ある家族役の動きに触発されて、他のメンバーが動いても構いません。ある家族メンバーの関係の変化は他にも波及するからです。それは家族がシステムである所以です。

「居心地のよい状況」が作られていくプロセスや家族の動きの変化を「アウトサイド」から見てみると、は大変興味深いものです。

最終的に「居心地のよい」家族造形を作った後は、改めて、しばらく静止し、その時の気持ちに焦点をあてます。その後の各メンバーからのフィードバックは、静止している時に感じたことだけでなく、完成するまでの動きを通して感じたことも語ってもらうようにします。

ファシリテーター役は、家族役同士の意見交流はもちろんのこと、事例提出者や観衆役などとの交流にも心がけます

改めて、「アウトサイド」と「インサイド」

最初の造形は事例提出者が「アウトサイド」から見た作品ですが、家族役が主体となった「居心地のよい状況」は「インサイド」からの作品となります。

前述したように、「居心地のよい状況」が作られていくプロセス（家族役の動き）について、興味深く注目していると、新鮮な発見をすることもあります。それは、家族の変化のありようです。

ところで、第一段階は事例提出者が「アウトサイド」から造形を作り、「インサイド」の声に耳を傾けました。「居心地のよい状況」を家族役自らが作るという第二段階は、「インサイド」からの動きを「アウトサイド」が見守っているのです。

準備に時間を要する必要がない（事例提出者のケース理解と簡単な家族情報があればいい）、参加者が一体となって事例のことを体験的に考えたり、味わうことができるなど、対人援助現場における利便性と展開可能性、面白さはさまざまです（第6号～第8号 参照）。

対人援助とは、援助者が「アウトサイド」から見た理解（アセスメントや見立て）と利用者や家族による「インサイド」からの語りを「家族の物語」として織り込んでいく作業なのかもしれません。

家族造形法を通じた事例検討はこのようなことを示唆しているようです。